

CT 冠動脈造影で狭心症の診断確度が増大

胸痛のある患者に対する CT 冠動脈造影の便益については、これまでに系統的に検討されていない。そこで本研究では、冠動脈性心疾患で狭心症の疑いのある患者に対する CT 冠動脈造影が、診断や管理、予後に効果がみられるかを検討した。

2010 年 11 月～2014 年 9 月にかけて、スコットランドの 12 カ所の心臓・胸痛クリニックから、冠動脈性心疾患により狭心症が疑われて紹介された 18～75 歳の患者 4,146 例を対象とした。被験者をランダムに 2 群に分け、一方には標準的処置に CT 冠動脈造影を加え (CTCA 群 ; 2,073 例)、もう一方には標準的処置のみを行った (対照群 ; 2,073 例)。試験開始時に臨床的に冠動脈性心疾患の診断を受けていたのは 47%、冠動脈性心疾患による狭心症の診断を受けていたのは 36%であった。6 週間後、CTCA 群で冠動脈性心疾患の診断に再分類されたのは 27%、冠動脈性心疾患による狭心症の診断に細分類されたのは 23%であった (対照群では、それぞれ 1%)。CTCA 群では対照群に比べ、6 週間時点での冠動脈性心疾患の診断確度および診断頻度が増大した (相対リスクはそれぞれ 2.56、1.09)。冠動脈性心疾患による狭心症については、診断確度は増大し (相対リスク 1.79)、診断確度はやや減少した (同 : 0.93)。これらの診断確度や診断頻度の変化は、予定されていた検査の変更 (CTCA 群 15%、対照群 1%) や治療の変更 (同 23%、5%) と関連していたが、6 週間時点での重症度やその後の胸痛による入院への影響はみられなかった。1.7 年後の心筋梗塞の発生は、対照群と比べ CTCA 群で 38%抑制されたが、有意ではなかった (発生数 42 例 対 26 例、ハザード比 0.62 ; $p=0.0527$)。

以上から、冠動脈性心疾患で狭心症が疑われた患者に対し、CT 冠動脈造影を行うことにより、診断確度が増大することが示された。また、介入ターゲットが明確になり、将来の心筋梗塞リスクを低下させることの可能性が示唆された。

出典 : Lancet. Published online Mar 13, 2015; pii: S0140-6736(15)60291-4